

時の動き

関東大震災100年から今を問う

高麗博物館 関東大震災研究チーム

大石 一雄

2023年は関東大震災から100年。今年9月には、虐殺された朝鮮人・中国人・社会主義者などを追悼する慰霊祭や記念式典が各地で催される。都立横網町公園内の「関東大震災朝鮮人犠牲者追悼碑」の前では、1974年から毎年9月1日に追悼式典が行われてきた。

2017年以来、追悼文の送付を取り止めてきた小池都知事は、今年も同様の措置をとるようだ。加害の記憶を消し去ろうとする意図が顕著である。昨今、流布されている「虐殺否定論」の動きの中でも象徴的な一件である。高校教科書でも「虐殺の具体的な人数を

表記しない」など歴史否定は教育現場にも及んでいる。

これは震災当時の官憲が、軍隊や警察の関与を覆い隠すために虐殺の事実を闇に葬ってきたことが大きい。朝鮮人に対する監視体制は震災後もさらに強化され、戦後の民主主義改革を経た今も放置されたままである。

◆高麗博物館の取り組み

多文化共生の街・新大久保にある高麗博物館では、歴史と記憶の継承を主な目的に7月5日から12月24日まで企画展示「関東大震災100年」を隠蔽

された朝鮮人虐殺」を開催している。今回の展示で最も注目されているのは、2021年に発見された『関東大震災絵巻』（雅号Ⅱ洪谷（きこく）二巻、福島県出身の教員画家が震災後3年ほどかけて描き上げた長大絵巻である。朝鮮人虐殺場面も含まれ、軍隊・警察・自警団や殺気だった群衆も登場する。虐殺が官民一体で行われたものであることが具体的に表現されている。巻物に記された作者の「自序」には、震災に遭遇しなかった人々に向けて「省慮（せいりよ）の念」を促したいとある。これこそ、100年後の今を生きる私たちに向けて、作者が残して

『関東大震災絵巻』

〔淇谷〕
きく



くれたメッセージなのではないか。

◆次世代に向けて

今年5月23日、立憲民主党の杉尾秀哉議員による「関東大震災時朝鮮人中国人虐殺に関する国会質疑」があった。100年ぶりの国会質問である。それに対して、谷公一防災担当相は「事実関係を把握できる記録は見当たらない」「さらなる調査は考えていない」と曖昧な答弁に終始した。これでは「歴史否定論」に同調していることと同じであり、虐殺された数千人に及ぶ朝鮮人の存在を無かったことにしようとするものにならな

現代の「流言蜚語」ともいえるマイノリティーなどの弱者に対する誹謗中傷やデマ・フェイク情報が、ネット上のSNSなどによって100年前よりもはるかに拡散されやすい状況にある。「入管法改悪」は植民地主義が未だ精算できていないことを可視化した。そして技能実習生などの外国人労働者にも迫害が起こりかねない。このような今の問題ともからめて、次世代に繋げる方向を探っていきたい。21世紀の現代社会でも国家や平和のためという美名のもと、「征服」「支配」「略奪」が正当化されている。差別と偏見の先には虐殺そして戦争がある、ということとを認識しなければならない。

高麗博物館は、追悼行事・慰霊祭などの市民活動とも連携し、100年を機に今後も歴史の記憶を継承していきたい。そして、多くの方に企画展示をご覧になっていただきたい。

（おおいし かずお）